

## 盤洲干潟(金田海岸)の観察

観察者：大野幸正、木村哲郎、芝田明子

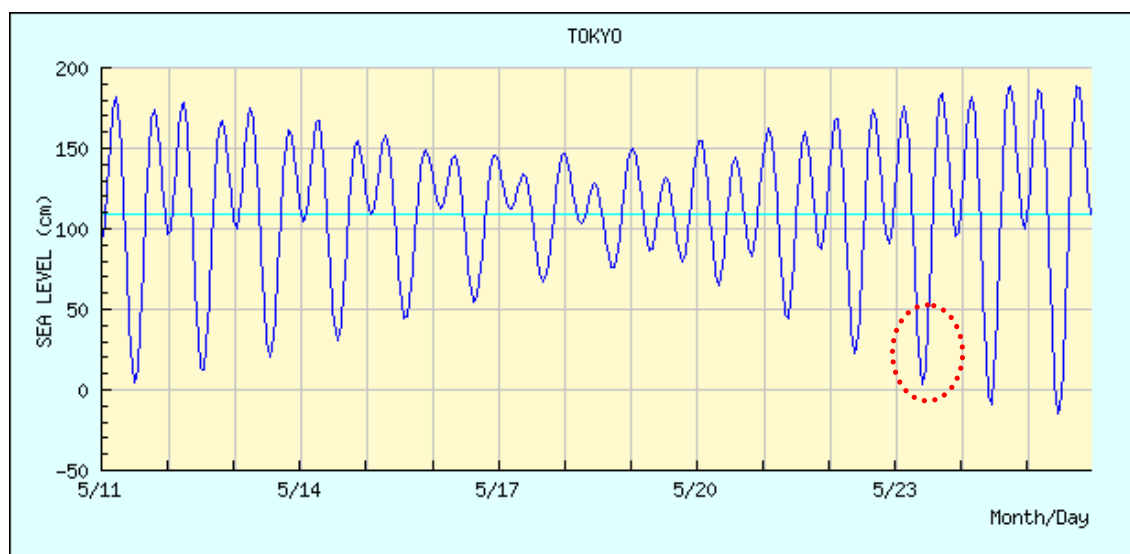
日時：2009年5月23日(土) 10:00-12:00

場所：盤洲干潟(金田海岸の三万坪の潮干狩り場)

観察したのは下図の赤い点線の範囲です。岸際から沖方向を目指して、波打ち際まで行きました。所々、熊手で干潟の砂泥を<sup>ほじくり</sup>、手網で潮溜まりを<sup>あさり</sup>ながら観察して、状況をデジタルカメラに記録しました。当日は、10時過ぎが最干潮時刻で、風が弱く穏やかな天候でした。



観察の範囲



推算潮位 (気象庁潮位表：東京)

### 【三万坪の潮干狩り場】

潮干狩り場の全景は、以下の写真に示すとおりです。埋め立てられた護岸際から 100-300mのあたりに、潮干狩りのお客さん達がたくさん集まっています。この埋立地には、東京湾に面した木更津の温泉「竜宮城ホテル三日月」があり、その駐車場の先に潮干狩り場の入り口があります。



潮干狩り場

埋め立て護岸が切れたところには、ヨシ原が広がります。

下の写真は三万坪の埋立地の南側を見たところですが、干潮時刻なので干潟が干出していますが、潮が満ちてくると、このあたり一帯が海となります。満潮時水位のあたりにゴミが溜まっているのが分かります。よく見ると、数 cm の小型のシオフキガイが多く打ちあがっていました。ウミナナ類（細長い巻貝）が結構いたほか、チゴガニなどが巣穴から掘り出した砂団子もありました。



3万坪の南側干潟



打ち上げられたシオフキガイ



ウミナナ類

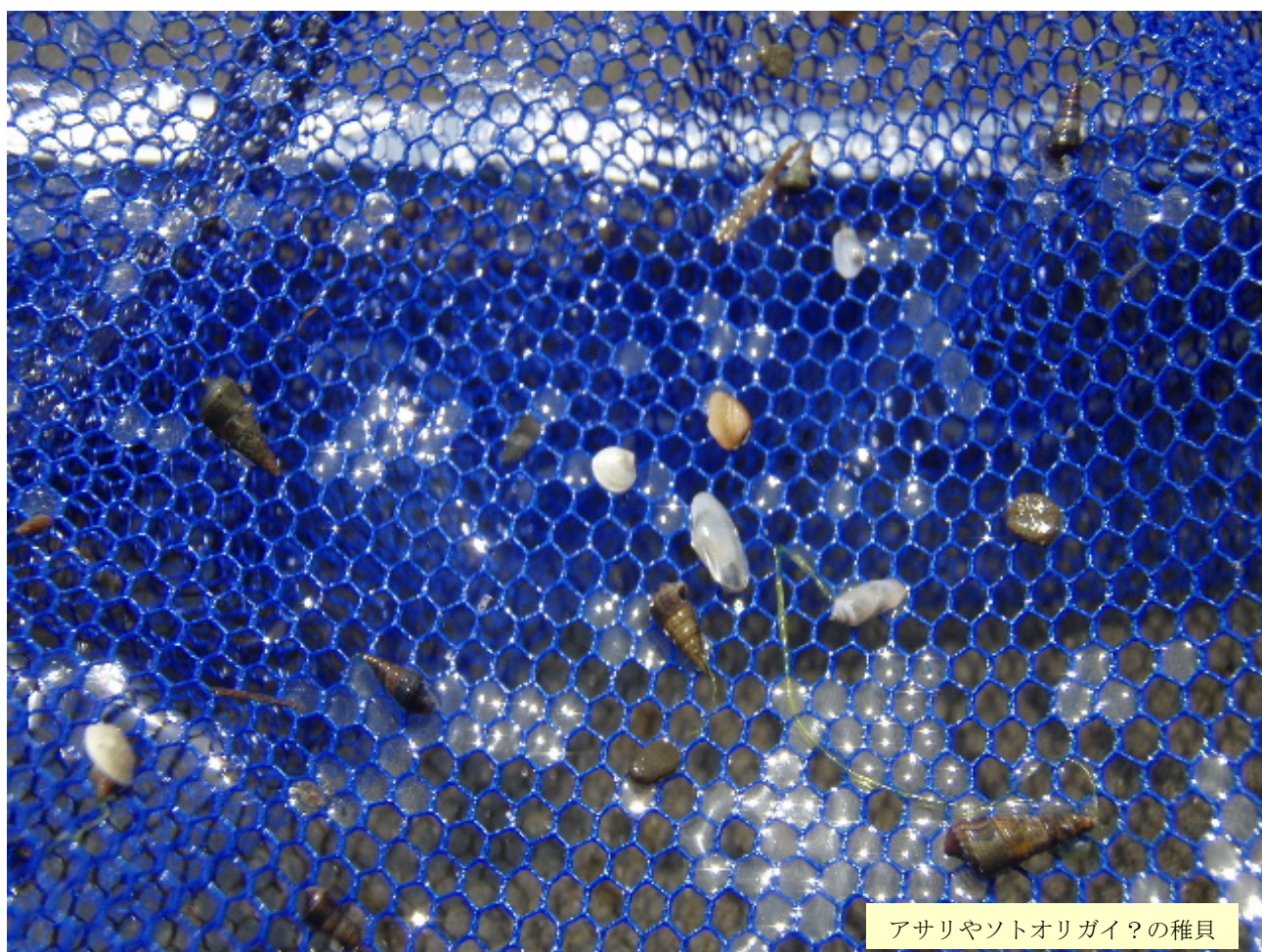


チゴガニかコメツキガニの巣穴



### 【干潟の岸寄りエリア】

潮干狩りをする人たちが多くいた辺りでは、アサリ、オサガニ類、ハゼ類、エビジャコなどがいました。全体に少ないと感じました。網目の細かい手網で砂地を篩うと、アサリやソトオリガイ？の稚貝がいましたが、これらも極く少量でした。





### 【干潟の沖寄リエリア】

沖寄りのエリアではアサリがさらに減少して、ほとんど姿を見かけることがありませんでした。替わりに出てきた貝類は、バカガイ、サルボウガイ（アカガイに似ている）、キサゴ（ナガラミとも呼ばれる巻貝）などで、通常、バカガイよりもたくさん見かけるシオフキガイがほとんどいないのが不思議でした。ハゼ類やエビジャコはこのあたりにもいました。



サルボウガイとバカガイ



バカガイ（すしネタでは青柳、小柱）



クロムシ（多毛類）の卵塊



ツバサゴカイ（多毛類）の棲管



ツメタガイ（お店ではイチゴガイ）・・・卵塊（右上）





### 【所感1：大野】

右の写真は潮干狩り場にて採集したアサリです。お客さん達が持ち帰るアサリが白っぽく見えて気がかりだったので、模様につけながら採取しました。これらを並べてみると、自分が見慣れているアサリの模様とは若干異なると思いました。

それにしてもアサリが少ないですね。数mmから1cm程度の貝が細目の手網に残らないことも気がかりです。獲り過ぎ、栄養、マンガンによる成長阻害、浮遊幼生の着底状況、鳥による捕食、干潟地形と流況など様々な原因が想定されます。

以前、千葉県漁師さんから、運河にはアサリが結構いると聞きました。そのような場所も確認して原因と対策を地元の人々の意見も踏まえて検討するなど、早急な対応が必要ですね。

右の写真は童宮場の沖から岸方向に走る大きな滞筋です。河口でもないのにこのような大きな段差が生じるのは、これまで見た覚えがありません。波浪のあたり具合が変化したのでしょうか？



20年以上前に盤洲干潟で次のような景色を見た覚えがあります。

『一面の干潟に、ぺたりと張り付いていたコアマモが、潮が満ちてきてふさふさとゆらぎ始めたとき。それまでどこかに隠れていたたくさんのケフサイソガニが、あちらこちらでコアマモの上に立ち上がって、ぶくぶくと泡を吹いている姿。』

ケフサイソガニは、はさみの付け根に「毛のふさ」があるのが特徴なのですが、今回見たのは、なんとなく、体格と色が異なるような気がしました。かつてと比べると多様さ豊かさともに大きく減少していると思いました。



## 【所感 2：木村】

お昼の 12 時すぎまで潮干狩りをしていました。この時間帯は、岸から 1km 近く離れた、かなり沖の波打ち際にいました。

この場所で上げ潮を迎えましたが、数分間で膝下まで海面が上がるほどの上げ潮の波が、テレビで見た小規模の津波のようで、速さと高さに驚かされました。以前、潮干狩りでおぼれた人がいたことを、2～3 例聞いたことがあります。通常は、潮干狩りは岸の近くで、集団で行うでしょうから、このような危険性は少ないと思いますが、これほどの速さで上げ潮が迫ってくるような箇所では、それも領けます。

また、砂質や生物も場所により異なることがわかりました。今回行動した岸から 1km 近く離れたあたりの狭い範囲内でも、掘った砂の中の様子が場所によりさまざまでした。

岸の近くでは多少深く掘っても細かい砂のままであり、小さなアサリがいくつか生息していました。岸から 20m 程度離れた箇所では、20cm 程度掘ると中の土が真っ黒で悪臭がしており、この層の中では貝は全く生息していませんでした。この原因が水質汚濁物質由来なのか、それとも他の原因なのか、しかもなぜこのエリアだけで見られたのかが解りませんが、注目したい点です。

さらに沖に行くと、粒径が大きい砂利や貝殻のかけらが多くなり、掘っても砂利のままでした。貝もアオヤギなど大粒の貝が多くなり、生息している貝が異なってくるのがわかりました。沖の方の砂利や貝殻は、海水につかっている時間が長いため、潮に流される間に細かく砕かれると思っていましたが、実際は逆でした。細かい粒は波によって岸近くに運ばれるのでしょ

このように、今回の盤州干潟では、上げ潮の速さと大きさ、さらに岸壁からある程度の範囲ごとに、生息する生物やその周辺の環境がかなり異なることが解りました。また機会があれば、いろいろな視点から観察していきたいと思います。



岸寄りの砂地：砂が細かい



沖の砂地：貝殻のかけらなどが多い



**【所感 3：芝田】**

海のない県で生まれ育ったためか、磯遊びの経験がありませんでした。当然、海の生物といえば魚屋さんにて売っているものしか知らず、それらの生息状況まで思いを馳せることはありませんでした。そんな経験値の少ない私の感想を簡単に記します。

まず、少し残念だったことは、岸辺の「ゴミ」です。潮干狩り地点の近傍の岸壁には、多くのゴミが漂着していました。付近は、長大橋を遠方に眺め、かつ、潮干狩りをする人たちの和やかな状況を楽しむことができる所でしたので、残念に思いました。

良かった点は、生物の種類や生態について説明いただきながらの干潟観察だったため、干潟の岸辺～沖では生息する生き物が違うということを感じることができました。単なる「磯遊び」でない楽しみ方を学んだ気がします。また、干潟の広さを体感できたことも良い経験だったと思います。今度、潮干狩りに行く際は、海に棲む生物を少しだけでも覚えから行き、海を楽しみたいと思います。



以上です。